

茂右衛門（もえもん）

小正月こしょうがつの前の日になると、村々で、

どんどどんと焼きのどんどこやあ

一そく六ば、くうれんと

すすはけ、すすはけ……

と、唱える子どもたちの声が聞こえてきます。子どもたちが村の家々を回って、正月飾りかざりのしめなわや門松かどまつとわらを集めるのです。

村の一軒一軒全部を回り終わった子どもたちは、広場に集まります。そこで、氏子うじこ総代そうだいの人の助けをかりて、さ・さ・のついた青竹を中心にならや門松を積み重ねます。

準備じゅんびがすっかりすんで、夕やみがせまるころになると、

となりのやつらは、大般若だいげんにやあ

あ・わ・き・びぬすんで、お宮のからすに笑われたあ

お宮のからすに笑われたあ……

と、となり村の子どもたちのはやしたてる声が聞こえてきます。

じんくそ坊主くそ坊主

お前らあは、くそ坊主う……

ど、こちらから声をそろえていい返します。口げんかですまないで、となり村の子どもたちと、しめなわの取り合いになつてしまうこともあります。そんなときは、夜通し見張りにあたります。

小正月の朝、まだうす暗いころに、わらに火がつけられます。村の子どもも、大人もみんな、手に手に鏡もちを持つて広場に集まつてきます。この火でもちを焼いて食べるのです。そうすると、この一年は、病気をしないといわれているからです。

ところが、大府新田では、

けむてやあぞ

けむてやあぞ

もつと燃やせ

どんどん燃やせえ……

ど、火がうまく燃え上がらないので、目を赤くし、顔をしかめた子どもたちが、大声でさげんできます。森から集めてきた落ち葉や川の岸から拾つてきた木切れを火の中へ投げこみますが、うまく燃えません。それを見たとなり村の子どもたちは、口々に、

燃えんぞ、燃えんぞ

火が燃えんぞ

新田では、火が燃えんぞ

も・え・ん・も・ん・さ・ん・が・い・る・ん・で、

（茂右衛門）

燃えんぞう

新田には、もえんもんさん

がいるんで、燃えんぞう……

と、しも焼けした手をふり上げ

ながら、はやしたてます。

大府新田には、「茂右衛門」

という名前の人が住んでいたそ

うです。



大府地区に伝わる話です。大府新田は、砂川沿いに開いた村です。そこに、「茂右衛門」という名前の人が住んでいて、「燃えんもん」とからかわれていたようです。小正月の行事は、「左義長」とか「どんど焼き」と呼ばれており、横根町や北崎町では今でも一月十五日の朝に行われています。